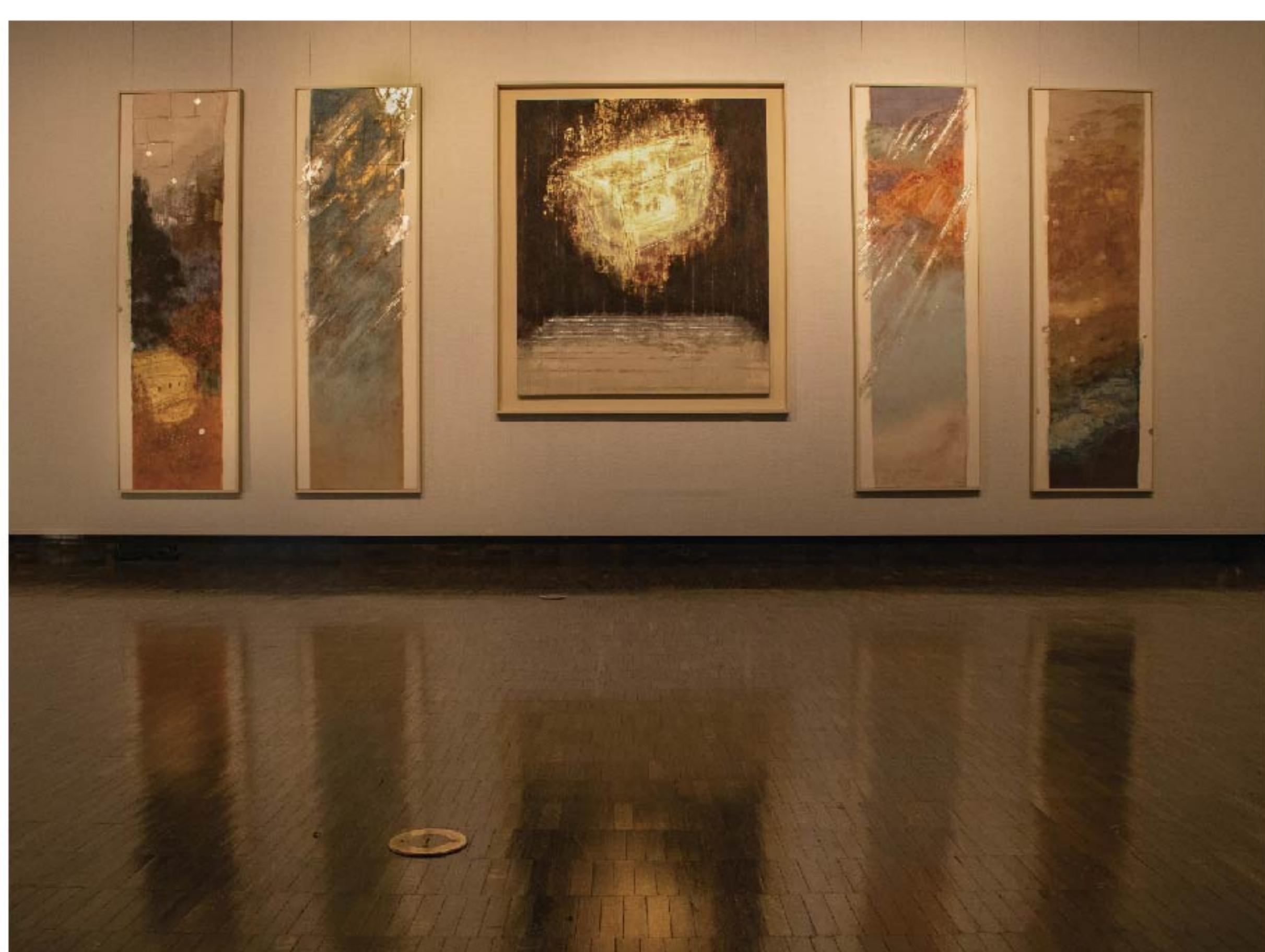


東 志織  
AZUMA Shiori



呼吸する棲家、私の星  
紙本着彩



## 呼吸する棲家、私の星 – 隠れ家について

ほんの少しだとしても、周りの世界よりも高く、ここから近いようで遠く離れた場所。何者にも阻まれず、誰の手も届かない、自身にとって最も個人的で「凝縮した孤独」を感じられる場所。私は制作のなかで、「凝縮した孤独」<sup>1)</sup> でのいるための「隠れ家」を、私の生まれたこの星の何気ない日々のなかに見出したい。

私は自身のための「隠れ家」を見出すために、この星のさまざまな景色を、社会的・客観的価値観から離れた視点で見つめ直すという手法をとることにした。何気ない場面に秘められている「隠れ家」を探るとき、私は表面を覆っている社会的・客観的な視点というフィルターを取り除くことで、内側に輝く安寧の場所を掘り起こしていくのである。

それがどのような意味を持つ物体なのか、どのような色調、質感、フォルムであるのかを、可視化や言語化せず形而上学的に捉えることで、「客観的な基礎をもたない価値」<sup>2)</sup> を見出す。主観的にこの星を捉えることは、何者にも阻まれない自身の「隠れ家」を発掘することになる。

こうして見出された「隠れ家」は、私たちの価値観が変容していくのと同じく、日々移りゆく可能性を秘めている。このような伸縮する概念を絵画的に表現するため、私は画面に現れる輪郭線を明確な一筋に絞るのではなく、迷い線を幾重にも重ねた表現が適切であると考えた。また、描ききらない余白を作ることで、流動するイメージを画面に定着させることを試みた。

迷い線とも言える不確かな線の集積と、画面の余白によって現れるゆらぎ、そしてひとことで示せない色や質感が画面から垣間見えることで、移りゆく「隠れ家」を画面に漏れなく描くことができるのだ。

1) G・バシュラール『空間の詩学』(筑摩書房、2002年)  
p-85

2) G・バシュラール『空間の詩学』(筑摩書房、2002年)  
p-38